

# 平成22年度 【 学園研究費助成金<B> 】 研究成果報告書

学部名 教育学部

フリガナ ウト ヤスヒロ  
氏名 宇土 泰寛

研究期間 平成22年度

研究課題名 グローバル時代の「人間になろう」をめざした小学校づくり  
～ 椋山女学園附属小学校の学校改革を通して ～

## 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	宇土泰寛	教育学部/小学校	教授/校長
研究分担者	高井京子	小学校	教頭
研究分担者	川野幸彦	小学校	教諭

## 1. 本研究開始の背景や目的等

現在、椋山女学園大学附属小学校は、学校施設面、教育内容面、教員の集団的指導力など、多くの課題を抱えている。グローバル時代という新たな時代の学校教育へと変革されなければならない。そこで、今年度から、「未来志向」と「ひらく」をキーワードに学校改革を進めていくことにした。しかし、教育内容の改革には、教師の意識改革も求められ、その内容の研究が必要である。特に、知識伝達型の教授法からの脱皮は、椋山女学園の「人間になろう」の趣旨からいっても必要である。しかし、それに代わるものの学習論の共通理解が確立されていない。そこで、新たな時代の教育実践を目指して、協働的学習や文科省の重視しているESD（持続発展教育）などの研究を進め、学校教員の資質向上を図ることを目的とする。

## 2. 研究方法等

昨年まで、小学校教員の資質向上や学校教育内容の改善のための研究会や研修会がなかった。そこで、小学校の組織改革を行い、研究指導部を設け、研究主任を置いた。この研究指導部は、低学年代表、中学年代表、高学年代表の3名から構成され、毎月一度、全教職員の研究研修会を開催するようにした。

- ・ 研究指導部のメンバーが、様々な研究会や本や論文などを通して基礎的な研究を行う。
- ・ 毎月の研究会で、教職員の研修を行い、その時の推進役や講師になって進める。
- ・ その研修で得た指導法等を実際の学級で実践する。
- ・ 卒業研究ゼミ生等が記録や観察・ビデオ撮影などを行う。
- ・ 小学校の研究紀要にまとめる。

### 3. 研究成果の概要

この度の研究は、大学の教員と小学校教員の協働的な研究実践であり、大学附属小学校の附属本来の研究の在り方が今まで実践されてこなかったという経緯に対して、本来的な附属小学校との協働的な研究の在り方を求めるものである。

研究の内容として、小学校のグローバル時代の「人間になろう」を小学校段階の児童の姿として、多文化共生社会を生きる子どもの育成を教科カリキュラムから日常的な生活指導のレベルまで研究し、具体化する。

その具体的な内容として、ピースメイキングを母体にした「仲よし学級づくり」を目標にして、E S D（持続発展教育）の国際理解教育、平和教育、環境教育などを扱い、学習方法として「協動的な学び合い」の方法で実施していく。

大学と連携した附属小学校における研究実践の進め方として、次のような段階で実施した。

- ①研究推進の組織として、研究指導部の設立と研究主任を指名し、研究推進の組織を作った。
- ②研究推進の構造として、研究目標は「人間になろう」の具現化であり、そのアプローチとして「協同の学び合い」の方法を探究し、学習内容として、「E S D（持続発展教育）」における国際理解教育・平和教育・環境教育を行うというトライアングルによる研究の枠組みを作った。
- ③名古屋大学と椋山女学園大学での大学教員等による「協動的な学び合い」についての研究会に、研究指導部の教諭が参加し、研究を行った。椋山の大学卒論ゼミ生も参加した。
- ④そこで研究習得した「協動的な学び合い」の方法を用いた研究授業を附属小学校で、研究指導部教諭3名が実施し、全教職員への「協動的な学び合い」の研修研究を行った。
- ⑤この研究授業を契機に、多くの学級で取り入れ始めたが、課題も出てきた。そこで、月に一回実施するようになった校内研究会で、協同学習の著名な研究者4名を講師で呼び出して、様々な課題解決の助言と理論研究の強化を図った。大学卒論ゼミ生の参加もあった。
- ⑥「人間になろう」を目指した「協動的な学び合い」は教科学習で次第に試みられてきたが、長放課における「ヒックとトゥースの広場」での子どもたち主体の様々なプロジェクト活動にもつながった。ピースメイキングの方法を用いて「仲よし学級づくり」にも結び付いた。
- ⑦E S D（持続発展教育）として、ブルキナファソ国支援交流を実施した。特に、駐日ブルキナファソ大使ご夫妻をお呼びしての特別授業と机と椅子の贈呈式、在ブルキナファソの日本大使ご夫妻をお迎えしてのアフリカからの感謝式、JICAの職員による授業、全校遠足でリトルワールドに行き、そこでのブルキナファソ集落の見学など、様々な学習と活動を行った。
- ⑧環境教育として、小学校のビオトープを大学の野崎研究室と連携し、ビオトープの実態を調査し、大学生が掲示ボードを作り、小学生の環境教育に役立った。
- ⑨6年生が「地球子どもプロジェクト」を学年全体で実施した。これは、総合的な学習と教科学習の融合とも言え、子どもたちの意識の拡大と自主的な活動を生み出す学習活動となった。

### 4. キーワード

①大-小学協働研究	②協同学習	③協動的な学び合い	④ブルキナファソ
⑤国際支援・交流	⑥プロジェクト活動	⑦E S D	⑧ピースメイキング

**5. 研究成果及び今後の展望**（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

- ・3月の校内研究会で、まとめと発表を行い、協動的学び合いの共有化をさらに図る。
- ・附属小学校の研究紀要に掲載する。そして、大学と連携した研究の持続を促す。
- ・附属小学校の観察記録を行ったゼミ生の卒業論文にもつながった。